

卒業生諸君！

— Commencement は同時に Beginning —

住谷悦治



四年の歳月は長かったですか、短かったですか。この四年間は、諸君にとって小学校から中学・高校を通じての修養とか研究とかいうあらゆる勉学の繰くりであった筈です。悠久の昔から永劫の未来へ音もなく流れゆく時間の流れのただ中にしばらく停止して「卒業」ということについて考え、反省してみましよう。

諸君は、大切な締めくくりの一年を不平常の学生生活のうちに過ごしました。果して学生生活と呼びうる生活であったかどうか。読書し思考し、人生の意義や青年学生の歴史的意義を考え対決する覚悟についての思いをまとめましたか。安保・沖繩・大学解体とか改革とかいうことに生甲斐と誇りを感じて突入し、ゲバ棒を揮ったり、暴力を是認したり、「目的は手段を正当化する」という哲学を主張して、機動隊との闘争に終始した学生もあつたことは事実の示すとおりであります。諸君が大学に籍を置いたころ、大学教育の根本方針としての「教育基本法」が、公布されましたが、その中心の問題は、日本国憲法をもったことはいままでありませんが、特に「自主性」と「公共性」とがその背骨をなしています。そのことはわたくしも諸君に述べて大学教育におけ

る普遍性を強調したと思います。これなくして大学生活はその意義を失うであります。たとえば自主的に考えること、そのた読書に努め、読んで考え、考えて読むこと、これもわたくしは諸君に述べました。いくら大学の教室における講義の時間割がつまっていたても、一カ月に良書一冊は最低でも可能であり、書物の多量の大小は考慮しても、一年に十二冊、四年間に四十八冊の良書をわがものとするができることも述べましたね。

良書とは、何十年、何百年の長きにわたって、幾百万かの読書人に読まれつづけて、生き残った書物で、青年時代に読んで教えられ、同じ本を壮年時代に読んで新しい意義を悟らせ、老年に読んでなおお人生の問題・思想の問題に感銘を与えられ、読者を刺戟し、教えつづける書物のとです。このような良書に、出会うことが、人生の読書生活の幸福であることをわたくしは諸君に説きました。四年の歳月は容赦もなく流れています。大学四年を終るに当って何かホロ苦がい悔いの心はないでしょうか。いま諸君は一般的意味における光榮ある卒業の榮譽を担うわけですが、卒業証書は正しい意味において「卒業」と「修業」であることを期

待しています。また教授と学生相互との切磋琢磨を経験したでしょうか。わたくしらは何も昔のありよき日を、今の学生諸君にこれみよがしのことをいうつもりはありませんが、わたくしは高等学校時代の校歌の一節「孤燈のもとに襟正す、夜半の窓の影一つ、天地寂たるただ中に、泣きても慕う世々のあと」という歌を心に繰返し夏休みに四千頁、五千頁の書物——一冊四百頁とすれば十冊ほどを読破したことがむしる夏休み二カ月の通例だったようです。

大学生生活が、人生的態度確立の時期だとするならば、時間を主体的に把握すべきであります。もし、そうしたことに悔いがあるなら、今こそ「卒業」と同時に新しく、現在の知識水準を一步も落すことなく、さらに前進すべきだと思います。

「一步退却、二歩前進」は緊張した人間の人生的態度と覚悟だと思えます。卒業式ないし卒業は Commencement ということは諸君が知っている通りであり Commencement は同時に Beginning であり、「初め」であることも諸君は知っていますね。どうか、卒業は終りではなく勉学の新しい出発であることを覚悟して下さい。これは大学教育の普遍性についての概念です。しかし、これは諸君・同志社大学生にとっては一面の真理にすぎません。同志社は、私学としての特殊性を大切な伝統として保持しております。それは創立者新島襄先生の建学の精神であり、キリスト教主義に立つ教育精神であり、一般に同志社精神といわれております。同志社大学卒業生は、この同志社教育の特殊性をしっかりと身につけて卒業して頂きたいと思えます。新島先生は、学生・生

徒をキリスト教宣教師や牧師とするためだけでなく、良心を手腕に運用する人物を養成し、国家社会に貢献することを要望されたのであります。大学の正門のところにあるいわゆる「良心の碑」は、する素晴らしい簡潔にして人間の本質をその高さ深さにおいて示して下さった訓言であります。卒業生として同志社を去るとき、あの碑の前に立ってしばらく四年の過去の大学生活に想いをめぐらして欲しいと思えます。

以上述べたことが、同志社大学教育における本質で、普遍性を基礎として同志社の特殊性を発揮すること、普遍性と特殊性との同時的把握、これこそ単に学生としてのみならず、人間として社会に立つ時も、A者はA者、B者はB者と人間の生甲斐をそれぞれ感じつつ生き抜けるものと信じます。知識、思慮、判断、そして良心。けっして、社会へ出てサラリーを得て、個人幸福とか、マイホーム主義とかいう個人主義に走るべきでなく、多少に拘らず社会公共の利益のため、社会の幸福が自分の幸福と結びつくものであることを忘れてはならぬと思えます。同志社の教育は根底において一貫して社会的・国際的なヒューマンイズムであること、それは良心教育の実現であります。もちろん教育とは教育者が教育されること、教育とは教育される者の自己確立と真の自己解放であること、そうしたことを教育者も反省百思して一体となって同志社教育の本旨を、そして新島先生の遺訓を、新しい時代には、つらつとして生かして行くことを切望します。わたくしは、自己にいいきかせることを、同時に諸君に贈る言葉といたします。では一応さよなら。

(総長)

卒業の栄光と責任

秦 孝 治 郎

今一九七〇年は、同志社学園の創立九十五周年目に当ります。創立者新島襄先生が四十七歳の働き盛りで永逝されてから八十一年目に相当いたします。

新島伝として一番最初に上梓されたゼー・デー・デビス著、山本美越乃訳補に「新島襄先生伝」の一節を抜翠して一八八八（明治二十一年）九月十日、新島先生が全国の主要な二十の新聞に公表された「同志社大学設立の旨意」を当時の文語体をそのままで参照しましょう。

「吾人私立大学を設立せんと欲したるは一日に非ず。而して之れがために経営辛苦を費したるも亦一日に非ず。今や計画略ぼ熟し、時期漸く来らんとす。吾人は今日に於て此を天下に訴へ、全国民の力を藉り、其の計画を成就せざんば再び其時期無きを信ず、是れ吾人が従来計画したる所の顛末を陳じ、併せて之れを設立する所の目的を告白するの止む可からざる所以なり。回顧すれ

ば、既に二十余年前幕政の末路外交切迫して人心動揺するの時に際し、不肖海外遊学の志を抱き脱藩して函館に赴き、遂に元治元年六月十四日の夜、窃かに国禁を犯し、米国商船に搭じ、水夫となりて労役に服する凡そ一年間、漸く米国ボストン府に達したりき、幸にして彼国義侠なる人士の助けを得て、アーモスト大学に入り、続いて又アンドヴァン神学校に学び、前後十余年の苦学を積み、而して米国文物制度の盛なるを觀、其大人君子に接し、其議論を叩き、茲に於て米国文明の決して一朝偶然にして生じたる者に非ず、必ず由て来る所の者あるを知る。而して其来る所の者、偏へに一國教化の敦きより生ずるを察し、始めて教育の国運の消長に大關係あるを信し、心窃に一身を教育の事業に擲たんとを決したりき」（原文のまま、下略）

その確信と名文はわが同志社学園の後世に残る趣意書であつて、同志社大学の教育方針ともなるのですから、毎年の卒業式に



は必ずプログラムの中に含まれ、読み上げる慣例となっていました。不幸今年の同志社大学においては、各学部別に分割して卒業証書の授与が行なわれますので、殊更ここに引用いたしません。

皆さんが同志社の各中学校・高等学校などの進学過程を経て、同志社大学・女子大学・大学院を卒えたとすれば、人生における十年間乃至十五年間をわが学園に勉強、研究した貴重な体験になります。果してどれだけの収穫を体得したでありましょうか。或年の一卒業生代表の答辞を抜翠してみましょう。

「思えば、この古き文化の地に高邁な理想の実現を求めて設立され、自由の伝統と清新の気風を誇る同志社に学ぶことができたことは私達にとって誠に幸でありました。この学園において私達は恵まれた環境下諸先生方の御懇篤な御指導により温かく、心豊かにしかも冷厳に真理を探究する不屈の精神を培われ、おかげをもちまして、今日修士の課程を了える日を迎えることが出来ました(下略)」との述懐が置土産となり、女子中学校生からは「私達が本校に入学致しましたのは、ちょうど同志社創立九十周年の栄光ある春でございました(中略)。幼かった私達でさえいち早くその雰囲気溶け込み一層努力しなければならぬと感じたものでございます。この三年間に体験した数多くの楽しい行事や出来事などを通して、私達は日を重ねる毎に成長してまいりました。(下略)」の感想を受けました。

一度同志社どの学校でも卒業した人々は必ずや同志社出身者―同志社マンの肩書を獲得せられ、同志社校友会(共学か男子の

み)と同志社同窓会(同志社女子部)の出身者の名簿にのることとなります。先ず同志社校友会の目的事項を掲げるならば、同志社校友会則第二条にこう決められています。「本会は、会員相互の交誼を厚くし、同志社と会員との関係を密接にし、且つ同志社の発達を助けることを目的とする」

同志社を卒業する光榮を担った人々は、同時に母校の発展に奉仕する義務を負うこととなります。その具体的な方法としては、学校法人同志社の経営に参画する重要な特権、即ち行政に対する人的要素を提供致します。同志社の憲法ともいうべき「同志社寄附行為」の第二章「役員」中、理事十三名・監事三名と第六条に定められ、第七条には、「理事のうち一名は総長とし、二名は大学長・女子大学長・学部長・校長及び園長の互選で定める。理事のうち七名は評議員の互選で定める。理事のうち三名は学識経験者のうちから、評議員会の意見を聞いて、前二項の規定によって選任された理事の過半数の議決をもって選任する。」とあります。これとともに第三章の「評議員」は、条文第三十条「本法人に評議員会を置き、評議員三十七名を以て組織する」と定められ、その選定は、学園の教職員と学外の校友、同窓に分割し、うち十五名は教職員のうちから互選する。また学外のうち十一名は校友会員、四名は同窓会で二十五歳以上のうちから選定し、七名は社友・教役者・父兄その他学識経験者のうちから理事会の議を経て理事長がこれを委嘱するという規定となり、三年間の任期と定められ、この評議員会と理事会が全学園の経営に当たっていることを銘記すべきであります。

両大学や各学校は、この学校法人同志社が設置者となり、学校行政の責任を負うのであって、当然、総長は教学の統轄者となり、理事長は、私立学校法・学校教育法・教育基本法に定められた責任者となっており、大学長や各学長はそれぞれの学校の教育に対する責任を分担しています。

現在、校友会の会員は、全世界に分布して生活せられ、十数万名を数え、同窓会員は約一万九千名に達し、校友会会長山口泰弘氏は、やはり同志社評議員で同時に同志社理事であり、同窓会長武間富貴氏も評議員でまた理事に列せられ、湯浅八郎氏は評議員会議長に奉仕していただいております。

校友会の情報機関としては、「同志社タイムス」が設けられ、毎月一回発行し、学園の近況を知らせ、校友の動静を通報し、喜びとともに悲しみをも感じさせます。同窓会は、「同志社同窓会報」を発行し、随想や教授の所見とともに会員の動静を知らせ、ことに母校に奉仕する仕事を忘れておりません。

校友会の経営は、校内に校友会館をもち、寺町通丸太町上る、新島会館を社交と宿舍の設備とし、内容的に充実した組織をもっております。学校のエキステンションとして東京都中央区銀座四の二聖書館ビルには、同志社分室とともに同志社クラブを創立九十周年記念事業の些細な一つとして新設し、また大阪市北区堂島船大工町毎日会館八階の大阪分室とともに東阪校友の親交に資しております。近く新卒業生が全国に散在せられましょうが、とくにこの三つの施設を利用されるよう切望いたします。

わが同志社の輝やかなしい歴史を顧るとき、その卒業生には多く

の人材を輩出しています。校友会名簿では、明治時代の巻で、第一は明治十二年（一八七九年）、海老名弾正・不破唯次郎・市原盛宏・金森通倫・加藤勇次郎・小崎弘道・宮川経輝・森田久万人・岡田松生・下村孝太郎・和田正脩・山崎為徳・横井時雄・吉田作弥・浮田和民の十五名が掲げられ、すべて、その当時の社会における一流の人材となったと信じます。筆者は「同志社九十年小史」に「同志社に育った人々」を執筆し、列記の大先輩もその人物伝に光彩を放っていますが、只骨格だけを羅列したに過ぎないのですから、他日を期して血を注ぎ肉づけをしこれに油光りを加え、わが母校出身者列伝を書きたいと念願しています。明治時代は、去る昭和四十年四月発行の名簿では僅か一〇頁に過ぎませんが、明治四十五年普通学校卒業生には筆者もその一人に列しています。只この年の五月には「同志社大学」の創立が決定され、ここに創立者の悲願が達成し、画期的な一大伸展を遂げたのであります。

大正時代の卒業生は、第十頁から三十四頁に至り、昭和時代は第三十四頁から七二六頁に達している。同志社が大学を創立してから長足の伸展を遂げ、全学の卒業生は九五〇名を数えたのであります。さらに、戦前、即ち昭和元年から昭和二十年までは名簿の上では一二七頁の卒業生であります。戦後即ち昭和二十一年から昭和四十年までが五六五頁となり昭和四十一年から昭和四十三年までの推定頁数を一二八頁とみれば、名簿未済分と併せれば合計六九三頁となり、如何に卒業生の大多数が最近に多くを数えたかがわかりましょう。人数の統計は「同志社九十年小史」の過去

と現在に掲げていますが、新しい数値としては、昭和四十四年十二月末日現在、校友一〇二、四五九名（永眠者五、一四二名を含む）同窓一八、七四八名（一、一〇〇名永眠を含む）となっております。

卒業生の年代別は大観して前記のようになりますが、どれだけ社会に役立つ人材が送り出されていますか。元日本銀行総裁、宮中顧問官であった深井英五氏が「明治十九年から二十四年まで」の在学中の思い出を次の如く語っておられます。「同志社で教えていただいたことは多い、その益は大きい、しかしながら、私も意義深しとするところは、校風の感化です。私の人生観は大にその影響をうけています。ここに人生観の談義をなすべきではありませんが、その一端を挙げてみれば、公共のために奉仕する精神と、個性を尊重し、自己判断に立脚する意気との結合であります。新島先生は犠牲奉公の典型ともいべきでありましょう。」（「同志社創立九年小史―同志社に育った人々」より）

明治は古くなったとはいえず、同志社の滋味、新島先生の衣鉢は、この時代に脈々として流れていたといつてよいでしょう。この時代の傑出した人物として救世軍の山室重平氏を忘れることはできない。「平民の福音」と自からの伝道行脚によって大衆の中に神の光りを注入したのであります。ことに「同志社スピリット」の造語で同志社人の印象に残っているのは次の主張であります。「同志社スピリットをもった有為なる男女の青年を養成して、これを社会の各方面に送り出す外はないと思います。所謂、同志社スピリットとは、神を愛し、人を愛し、そのために凡ての者の

僕」となつて奉仕する基督教的精神の他にないと思います」と。

もう忘れられているかも知れないが、街頭に立つて救世軍の人々が、歳晚において慈善鍋に喜捨を求めめる声は山室救世軍中將の発想であり、これが大衆に対する医療施設や社会福祉事業の萌芽となりました。同志社の出身者は一般社会や実業界に華やかな存在を打出したのではなく、むしろ地味な人の魂を救う伝道界や社会事業界、学界などに頭角を現わしたとみるべきでしょう。

今からもう十年も以前になりましたが、東京の校友会大会に出席し、数百名の盛んな会合でしたが、その中で、自家用車もっている方は手を挙げて下さいといったところ、明治・大正の卒業生に非ずしてすべて昭和の戦後に卒業した、然も十年以来の青年紳士ばかりでありました。現在でなくも十年も以前の実状でかく新進気鋭の人々が大きな活躍を遂げ、無名の人材が多からぬことに驚きました。筆者は、校友会の名簿をめくりながら人物の脈脈を探検することに特別の興味をもつものです。

かつて大阪の有名な貿易会社の玄関に、一人の外人が訪ねてきました。「受付」で、大きな声で「同志社いるか」と叫んで、同志社出身者の語学の達者な社員を呼ぶのでした。「同志社いるか」との突嗟の叫び声は、やがて卒業生一人一人が同志社大学とその他の学校を背負って立っている存在を探がすわけでありました。一度び校門を巣立った人々が同志社学園の責任を全身に負っていることを銘記すべきであります。五年後には母校創立百年が待っています。大きなヴィジョンを描きながら物心両面の期待と責任を全うしようではありませんか。

（同志社理事長）